

厚生省母子相互作用の臨床応用に関する研究班

昭和60年度総括研究報告書

班長 小林 登(国立小児病院小児医療研究センター)

小児医療ばかりでなく、小児の発育に関係する諸問題に対する母子相互作用の意義は、本研究班の研究の結果次第に明らかになってきた。とくに、母子関係、家庭・育児問題など社会的な多くの問題も、その基礎に、母子相互作用あるいは親と子の相互の関わり合いに問題があり母子相互作用の臨床応用について研究することの必要性は近年ますます強くなっている。

本研究班は、昭和60年も引き続き、産科学、小児科学、精神科学、耳鼻咽喉科学、心理学、教育学、育児学、行動科学、文化人類学、看護学、工学などの領域から60名の専門家に研究協力者として参加を求め、母子相互作用の臨床応用について研究を行った。

当班では6項目のプロジェクトを組み学際的な研究を行った。各研究者の研究成果は、以下に添付する報告書に詳細に記されているが、各プロジェクト別の成果をまとめると次のようになる。

プロジェクトⅠ：比較行動学的研究

動物行動との比較研究を通じて母子相互作用の臨床的意義を明らかにするプロジェクトで、本年度も、ニホンザル、犬などを用いて研究が行われた。ニホンザルの研究では、母子関係に影響を及ぼす諸要因が検討され、母親では出産経験、群れの中での順位、母親の個性などの多くの要因が影響していることが明らかになった。またこうした母親や代理母により育てられた児の観察から、児の行動にも母親の影響が大きいことが明らかになった。また犬の研究から、母親の育児行動には、児の状態(障害など)が影響すること、母子分離は、母親の児に対する愛着に大きな影響をもつこと、児の死亡に対し母親は強い精神的肉体的影響を受けることなどが明らかにされ、人間の母子相互作用を研究する上での重要な示唆が得られた。

プロジェクトⅡ：周産期学的研究

周産期をめぐる多くの研究が行われ、超音波を用いた研究からは、胎児の眼球運動の観察により胎児の神経発達の評価が可能であり、胎児行動科学の解明への有力な手段となることが明らかにされた。サーモグラフィを用いて顔面の温度の変化を測定することにより乳児の情緒、ストレス反応や愛着・認知の発達を見ることが可能であることが明らかになっ

た。脳内の神経ペプチドの脳内分布の研究では胎児脳細胞が選択されながら発達することが明らかになり、またヒト胎落膜細胞のプロラクチン産生に及ぼすアラキドン酸の抑制効果についても検討が加えられた。

臨床的な研究では胎児期や新生児期の環境が児の行動や発達に影響を及ぼすことが研究され、また帝王切開が母親に与える精神的な影響やその回復に対する援助の重要性、母親の新生児へのTouching行動と愛着形成との関連、愛着形成がその後の他者との安定した人間関係の確立に重要な関連をもつことなども明らかになった。

母子相互作用の基礎となる新生児のきゅう覚や味覚、聴覚などについても研究が行われ、新生児や未熟児も優れた能力をもつことが明らかとなり、また新生児の皮膚表面でglycerideから遊離脂酸が大量に生成していることも明らかにされた。

また難聴児の原因には、周産期の黄だんや仮死による内耳の感覚細胞の障害が多いこと、補聴器の使用で親子間のコミュニケーションを円滑にし、親子のきずなを強めることの重要性も指摘された。

プロジェクトⅢ：発達心理学・行動科学的研究

乳幼児の発達環境としての両親や周囲の人々の関わり合いが研究され、母親の子供に対する期待像が、子供への働きかけや育児の方向を定めること、環境条件が幼児の健康や安全に影響を及ぼすが同じ環境のなかでも、そこに住み幼児に関わる人の側の要因で環境条件は規制されるので、母親が積極的に働きかける態度を養うよう指導することが重要であることも指摘された。このような働きかけは幼児の言語修得の面でも重要で、養育者との相互作用の良いものに好影響があらわれていた。また、自閉症児の研究から幼児を受容し、幼児自身の自発的動きを根気よく待つことの重要性も指摘された。また、母子あるいは夫婦間の心理学的距離テストも開発され、これを使いながら面接により親自身が問題点に気付いてゆくことが親子関係の異常にもとづく疾病の治療に有効であった。

このように、母子相互作用による安定したシステムが確立していると、乳児は心の健康な発達が出来、その後の環境探索、課題解決、社会的親和、自立と協力などの発達も正常となる。一方、このような安定した母子システムが作られずアタッチメントの発達が充分でない場合には、虐待のような親子関係の破綻による異常がみられた。

このような母親は、その発達課程で同様に母子相互作用に欠ける面があることも明らかになった。またこのようなハイリスク群をスクリーニングするのに適切な日本版の家庭教育環境の評価法も研究し完成された。以上の他、密度効果の研究から、行動空間の大きさや仲間との相互作用は個体の成長に大きな影響を持つことも明らかになった。

プロジェクトⅣ：小児科学・臨床心理学的研究

心身症が近年増加していることが明らかになり、その背景として親子関係につき研究が

行われ、強い母親、口やかましく一方的で抑制的な母親が多く、また子供の感情表出が抑制されている例が多いこと、父親は慈父厳母型でおとなしく弱々しい例が多いことなどが指摘された。これらの研究から出生後3年間の母性一体となった相互作用は以後の生活に極めて重要であり、心身症の治療の上ではこの点に戻り親子関係を確立することが重要であり、最近問題となっているいじめも、心身症が背景になっているいじめも、心身症が背景になっている例があることも明らかにされた。

またチックやけいれんのある、障害児の場合にも、環境との関わり合いや、親の態度について配慮することが、疾病の治療や親子関係の確立の上で重要であり育児を容易にし、また障害児の保育に父親が参加することは父親の意識を高揚させ、母子への理解・援助を強化する効果があることが明らかになった。

こうした心身症や母親の精神障害の成立には、母親の不安や未熟性などが重要な役割を果たしていることから、母親へのサポートシステムの整備や母となるための教育なども今後の重要な課題として指摘された。

母親が自己に対し肯定的な感情を持っていねことが親として望ましく、この点からも母親の幼児期の経験が重要であることが明らかにされた。また、父親に求められる特性についても研究が進められた。

プロジェクトV：社会小児科・文化人類学的研究

地域における育児の特性の調査が行われ、奄美大島での母子関係では母と子のきずながしっかりしており、母子間の認知のズレも小さく、バランスのとれた母子関係であることが明らかになった。一方、秋田県の調査では、農村の都市化、近代化により農山村の小児の生活環境が変革し、小児心身症が増加していた。中学生の生活意識の調査では自立性の欠如や自我の成熟の遅れが著明であり、これが心身症増加の原因の一つであることが明らかになった。

共働き子育てをなしとげた女性の意識調査では、共働きであっても子育てを重視してこれに立ち向かって来ており、共働きは子供にプラス面が多いと受けとめているものが多いことが明らかになった。

このほか、母子相互作用の研究成果の臨床応用につき、人間科学の臨床適用の原則に基づき検討が加えられた。

プロジェクトVI：育児家庭基盤などの実態に関する調査・疫学的研究

我が国における育児の実態と被虐待児症候群の発生状況に関する調査が行われた。被虐待児症候群の調査では、90施設より129症例の報告があり、これらの症例の二次調査により、親の未熟性や異常な性格、家族関係の問題点、親の生育歴、長期の母子分離などの問題点が指摘され、虐待側の親の乳幼児期を含めた母子相互作用の重要性が明らかになった。わが国

の育児の実態からは、大部分の母子は望ましい育児や母子関係にあるが、一部にここから外れ、問題を生じる例があり、今後このような例を把握し改善することが、これらの子供が親になった場合の問題点の解決につながる事が明らかになった。

以上6つのプロジェクトに別れて研究が行われたが、これらの成果は、研究班総会の場で研究協力者全員による討論が行われ、母子相互作用の臨床応用の重要性が確認された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



小児医療ばかりでなく、小児の発育に関係する諸問題に対する母子相互作用の意義は、本研究班の研究の結果次第に明らかになってきた。とくに、母子関係、家庭・育児問題など社会的な多くの問題も、その基礎に、母子相互作用あるいは親と子の相互の関わり合いに問題があり母子相互作用の臨床応用について研究することの必要性は近年ますます強くなっている。

本研究班は、昭和 60 年もひき続き、産科学、小児科学、精神科学、耳鼻咽喉科学、心理学、教育学、育児学、行動科学、文化人類学、看護学、工学などの領域から 60 名の専門家に研究協力者として参加を求め、母子相互作用の臨床応用について研究を行った。

当班では 6 項目のプロジェクトを組み学際的な研究を行った。各研究者の研究成果は、以下に添付する報告書に詳細に記されているが、各プロジェクト別の成果をまとめると次のようになる。